

資料

緩和的がん薬物療法中の進行・再発がん患者に関する文献検討

モーエン智子*、国府浩子**

A Literature review of patients with advanced or recurrent cancer Palliative chemotherapy

Tomoko Moane*, Hiroko Kokufu**

Key words: advanced / recurrent cancer, palliative chemotherapy, cancer

受付日 2020 年 10 月 23 日 採択日 2021 年 1 月 19 日

*熊本大学大学院保健学教育部 **熊本大学大学院生命科学研究部

投稿責任者 : モーエン智子 moane@kumamoto-med.jrc.or.jp

I. はじめに

進行・再発がんにおけるがん薬物療法の目的は、延命および症状緩和であり、患者の Quality Of Life (以下、QOL とする) の向上を目指して行われる。がん患者は病状の変化や治療の状況、また副作用により、少しずつ身体の変化を体験しながら、身体的苦痛がないことで化学療法の継続に納得し、望ましい生き方が続けていられることに重きをおき、また命の限り霊的信仰に従い自分らしく化学療法を受け入れるなど、化学療法を受け入れる努力をしながら治療の継続¹⁾ やさまざまな生活調整に取り組んでいる²⁾。

進行・再発がん患者に関する研究では、進行臓器がん患者の緩和的がん薬物療法は、痛みや身体機能の改善、延命効果が期待でき、進行性非小細胞性肺癌患者においては倦怠感と、咳嗽の軽減、乳がん患者においては倦怠感の改善に関する報告がなされている³⁾。

しかしその反面、死期が近づいた時期での薬物療法は、QOL の向上や症状マネジメントには十分つながらずに、患者の生活の質の低下を臨床上で経験す

ることがある。緩和ケアの Quality Indicator (以下、QI とする) では、抽出された 15 の QI の中で、がん薬物療法の質の低さを示す項目として、「最期の化学療法から死までの期間が短い」「新規化学療法レジメンを始めた日から死までの期間が短い」の 2 つが示されており⁴⁾、すべての緩和的がん薬物療法が、患者の QOL に必ずしもつながらない恐れがあることが考えられる。

近年、がん医療においては、多くの薬物療法が開発され、それらには化学療法、内分泌療法、分子標的療法が含まれる⁵⁾。さまざまな種類の治療薬が開発される中、緩和的がん薬物療法をうける進行・再発がん患者は、不確かさの中で揺れ動き、残された治療法であるがん薬物療法を継続しながら、副作用や生活調整、また治療の選択や中止の意思決定など、多彩で連続した課題に取り組みながら、自分らしく生きることを目指している。そのような背景のもと看護師は、さまざまな課題を抱える患者と向き合い、また共に考え、悩みながらケアをしていると考えられる。

本研究では、緩和的がん薬物療法中の進行・再発がん患者に関する国内研究を振り返り、現状を概感す

るとともに、今後の看護の示唆を得ることを目的に検討する。

II. 研究方法

1. 用語の定義

進行がん；発生したがん細胞が組織内部の深くまで進行している、または原発巣以外に腫瘍がみられ、手術では切除不可能ながん。

再発がん：手術などで一度根治したにもかかわらず、別の場所に同じがんが再びみられること。

緩和的がん薬物療法：がんの進行を抑え、がんそのものによる身体症状を緩和し、延命および症状緩和を目的におこなっている。化学療法（抗がん剤）、内分泌療法、分子標的療法とする。

2. 文献検索方法

検索日を 2020 年 8 月 23 日とし、医学中央雑誌 Web 版 Ver. 5 を用いて、進行・再発がん患者で、がん薬物療法を受けているがん患者に関する文献検索をおこなった。検索キーワードは、「腫瘍」and「がん薬物療法 or 抗腫瘍剤 or 抗がん剤 or 分子標的薬」and「進行 or 再発」and「看護」とし 128 件が抽出された。

抽出された 128 件の抄録を読み、研究参加者が進行・再発がん以外を対象にしたものや治療目的が異なるものなど 53 件を除外した。絞り込んだ 75 件について、「進行・再発がん患者・家族および看護に焦点を当てた研究であること」「延命又は症状緩和を目的とした緩和的がん薬物療法をおこなっている患者を対象とした研究であること」を選定基準として論文を精読し、最終的に 40 件を分析対象とした。（表 1）

III. 結果

1. 研究の動向

抽出された文献は 40 件であり、2004 年に 4 件、

2005 年から 2009 年に 6 件、2010 年から 2014 年 10 件、2015 年から 2019 年 20 件と、年々増加傾向にあった。また外来での治療を対象としたものは 31 件あり、2004 年に 5 件、2005 年から 2009 年に 5 件、2010 年から 2014 年は 8 件、2015 年から 2019 年は 13 件と年々増加傾向にあった。

研究対象は、患者対象が 35 件、看護師対象が 2 件、家族対象が 2 件、患者・家族対象が 1 件で、患者を対象とする研究がほとんどであった

研究対象のがん種は、肺がん 7 件、大腸がん 7 件、乳がん 6 件、肝臓がん 2 件、膵臓がん 1 件、血液がん 2 件、消化器がん 2 件、複数のがん種 9 件、記載なし 4 件であった。

研究方法は、質的記述的研究 32 件、グランデット・セオリー・アプローチ 2 件、量的研究 4 件、関連検証・混合研究がそれぞれ 1 件であり、質的記述的研究がもっとも多かった。

2. 文献の内容

文献を精読し研究内容に着目して分類した結果、患者の体験、患者の心理・サポート、患者のセルフケア、がん薬物療法を受ける患者家族、がん薬物療法を受ける進行・再発がん患者の看護、に関する研究がなされていた。

1) 患者の体験に関する研究

10 の文献が患者の体験に関する内容であり、がん薬物療法を受けながら生きていく体験、困難な体験、副作用の体験について報告していた。

がん薬物療法を受けながら生きていく体験で竹山⁶⁾は、進行肺がん患者の病いの体験の意味づけについて報告し、患者は【周囲の支えを実感する】と語り、化学療法を受け止め、がんと付き合いしていく方法を模索し、【新たな生き方を見出す】と意味づけていた。また今までの生活を再構成しながら【今までの生き方を保つ】ために、家族に心配をかけないように肩の力を向いて平常心で生活することを心がけ、

【生きる意味に気づく】ことで、苦痛に耐える力と希望をもち、これらが治療を受けることにつながる」と示されていた。また患者は治療中においても【生きている喜びに気づかされる】【人生の締めくくりの準備をする】という体験をしていることを報告していた。

小貫ら⁷⁾は、手術後に再発した肺がん患者が外来で治療を受けながら生きていく体験を明らかにしていた。患者は【積極的にがんに関与することを実践し自分に合った治療を選択する】【生涯続く高額な治療費への不安がある】より、根治しない治療への経済的負担と少しでも長く生きたいという期待の中で葛藤しながら治療を選択し、【家族の愛情を再認識する】して、繰り返される治療生活の中でも家族や友人の大切さと支えられていることに気づき、【根治を望めない治療による身体変化や病状悪化に落ち込む】という体験をしていることが明らかにされていた。

困難な体験に関する内容では、森本ら⁸⁾は、地方都市で外来化学療法を継続する高齢患者の困難とニーズを明らかにしていた。困難の中心は、【治療による様々な苦痛を伴う副作用症状】【回復しがたい体力の低下】【病状の悪化と治療の不確実さへの不安】に集約される繰り返し行われる化学療法の積み重ねによってもたらされる困難とし、また【自己での問題への対処法の不安】や【通院治療継続の心細さ】を、治療継続によってもたらされる困難と報告していた。また高齢患者はニーズとして【治療と自分らしい生活の維持】【在宅療法を円滑にするための情報提供と医療システムの整備】【配慮が行き届いた適格な医療・看護の提供】を求めていることも明らかにされていた。

また外来で化学療法を受けながら生活するがん患者の困難を明らかにしていた林田ら⁹⁾の報告では、患者は【通院で化学療法を受けることから生じる負担】で、通院による身体的苦痛や長時間の治療による疲労を困難と感じながら、病状の進行に伴う【取り除くことができない症状の辛さ】を体験し、【今よ

り状態が悪化することへの懸念】【がんと共に生きることの脅威】【死を意識する辛さ】【医師との協調での戸惑い】といった様々な困難を体験していた。

三木ら¹⁰⁾は、オキサリプラチンによる抹消神経障害をもつ進行再発大腸がん患者の体験を報告し、【自ら体験して初めてわかったしびれの感覚】【しびれを我慢してでも生きたい】【ぎりぎりまで「自分で自分のことができること」を死守】などの有害事象の体験が明らかにされていた。患者は有害事象が生活に及ぼす脅威を認識しながら、「生きたい」という強い意志をもち、自らの安全性や自立性の確保を抹消神経障害の許容の限界と決め、懸命に治療を継続している患者の姿を示していた。

2) 患者の心理・サポートに関する研究

12の文献で、治療や療養生活に関連した患者の心理と、家族や周囲との関わりに関する研究が報告されていた。

太田ら¹¹⁾は、肺がん患者の初回治療の時期に抱く思いとして、化学療法を信じ、医師を信頼し、治療が順調に進むことで安堵するといった思いや、治療を継続するために家族や医療者からの支えに感謝し、医師の勤める化学療法を受けることで抱く、病気を治すことができるかもしれないという希望について明らかに、笹井は¹²⁾死ぬかもしれないという命の危機から「死が迫っているかもしれない肺がんの治療の先行きが読めない」「自己が存在していく基盤が揺れ動く」というように次々と不確かさが引き起こされることを明らかにした。また長ら¹³⁾は、治療延期を繰り返すがん患者の思いについて述べ、患者は【治療延期の判断は主治医に任せる】【治療延期は仕方がないと受けとめる】【治療延期に拘らず変わらない生活を送る】としながらも、【化学療法にかける】【治療延期がもたらす苦痛の回避と効果に一喜一憂する】という思いの中で揺らぎながら、【生活と共に治療を継続したい】や【治療延期は今後の生き方を考えさせる】という価値を見出していることを報告してい

た。

宮津ら¹⁴⁾は、外来通院治療中の患者の療養生活で抱く思いを明らかにし、患者は、周囲の友人、姉妹、配偶者に感謝しながら、迷惑をかけたくないと考えていること、副作用による外見の変化や経済面、生活に関する情報少なさに不安を抱いていることが明らかにされていた。また戸田ら¹⁵⁾は、進行大腸がん患者が外来で経口抗がん剤治療を継続する過程で抱える思いを明らかにし、患者は、不確かな治療に臨む時期、生活の織り込む時期、行く末を案ずる時期という3つの時期を移行し、全過程で“期待と不安の狭間に揺らぐ”思いであることを報告していた。また外来がん化学療法の苦痛のスクリーニング後の症状改善のための対応に必要なリソース¹⁶⁾や、化学療法を受けている再発がん患者の希望の維持に影響するソーシャル・サポートについて¹⁷⁾明らかにされ、情緒的サポートや道具的サポートが有益であること¹⁶⁾が報告されていた。

3) 患者のセルフケアに関する研究

12の文献【患者のセルフケア】について述べられていた。鈴木ら¹⁸⁾は、治療を継続するがん患者のセルフケアを行う上での問題とセルフケアを明らかにした。患者は食べる工夫をし、有害事象に関する知識を得て、主治医と治療間隔についての相談や家事を家族に任せる、また気持ちに折り合いを付けたり、気分転換をするといったさまざまなセルフケアを積極的におこなっていることを明らかにしていた。

また薬剤によって生じる有害事象である、爪や指先の皮膚症状¹⁹⁾、手足症候群（以下、Hand-Foot Syndrome: HFS）²⁰⁾、脱毛²¹⁾、排便²²⁾などの症状マネジメントにも取り組んでいた。田村ら²⁰⁾は、外来でカペシタビン治療を受ける再発・進行乳がん患者を対象に半構造化面接を行った結果、どのように有害事象の一つで手足症候群といわれる HFS マネジメントを行っているかを明らかにしていた。患者は HFS マネジメントを『治療継続と自分らしい生活の

両立』という現象とし、これらは【HFS が治療や生活に及ぼす影響の認識】【手足の皮膚の変化に対する関心】【手足の皮膚をいたわる努力】【努力を続けていける見込み】【現状と治療目標のすり合わせ】の5カテゴリーから構成され、HFS の症状や、予防策を行うことによる生活への影響を考慮しながら、おのこの治療目標を吟味して、治療の継続と自分らしい生活の維持の両方を目指そうとしていることを報告していた。糸川²³⁾においても、患者は「よりよく生活するための方法を探索しながら快適に暮らすための生活調整」や「身体症状が強く出現する時期を予測し、その時期の家事や仕事による負担を軽減するための生活調整」など取り組んでいることを報告していた。

井ノ下ら²⁴⁾は、化学療法を受ける再発白血病患者の有害事象への対処行動の構造を明らかにしていた。患者は[経験と情報から必要な対処行動を見極める]、[症状をコントロールしながらうまく付き合っていく]や[緩急をつけて必要だと思う予防行動を継続]していた。また[日々の乗り越える糧をもち治療を受け入れていく]努力をし、化学療法の継続とともに患者個々がエネルギーのバランスを鑑みて、より効率的で有効なものへと自身の対処を洗練し続ける取り組みをしていることを述べていた。

4) 緩和的がん薬物療法を受ける患者家族に関する研究

3つの文献が、がん薬物療法を受ける患者家族に関する研究であった。

二井谷ら²⁵⁾は、外来で化学療法を受ける進行・再発消化器がん患者の配偶者の困難と肯定感について報告した。配偶者は、「自分の思いが配偶者に通じない」「病気になって変わった配偶者を受け入れられない」など、患者との関係性について困難を感じている対象者が多かったことを明らかにした。本間ら²⁶⁾は、外来で化学療法を受ける進行がん患者の家族の、「日常生活の具体的なケアを家族だけで行う不安」

「家族が相談できる環境が欲しい」「前向きに治療に取り組める環境を優先させる生活に神経を使う」「化学療法のみ懸ける期待と迷いがある」「限られた命に対する望みの相違により家族関係が歪む」といった、5 つの揺れ動く思いを明らかにし、患者や医療者との関係性、将来の見通しの不確かさ、経済的な負担に関する困難感を抱いていることが報告されていた。

5) 緩和的がん薬物療法を受ける進行・再発がん患者の看護に関する研究

鳴井ら²⁷⁾は、外来で化学療法を行っている病院外来看護師を対象に、進行がん患者を支えていく上で現在の外来看護にどのような問題があり、その問題解決に向けてどのように取り組んでいく必要があるのかを、フォーカスグループインタビューで明らかにした。看護師は外来での短時間の関わりのため、患者に踏み込めず、患者の表面的な部分しか知ることができていないという現状から、患者の生活上の問題を把握し、指導するといった関わりを持つことに困難を感じていた。また取り組みとしては、患者が話せる環境を提供する役割を担っていることを意識して看護し、先の見通しをたてて治療に取り組むための看護実践の必要性を示し、これらを実践していくためには、外来のシステムづくりを病院全体として検討していくことが重要であると報告していた。

本間ら²⁸⁾は、心理社会的問題を抱えながら治療を継続している進行がん患者を支えるための外来看護を検討するため、外来看護師は進行がん患者の心理社会的問題をどのように認識し、どのような看護援助を行っているのかを面接調査にて明らかにした。外来看護師は、がんと共に社会生活をおくりながら治療に取り組む患者の心理社会的問題「日常生活の制限に関して」「自分の役割発揮に関して」などの問題解決に向け、「患者の治療継続を支える精神的サポート」「治療を受けながら生活する患者の日常生活に

対する支援」などの看護援助をおこなっていた。また看護援助を行いたいと考えながらも、外来の体制によりできないジレンマを抱えながら、患者に関わっている現状を明らかにしていた。

岡本ら²⁹⁾は、初回治療を受ける非小細胞肺癌患者に対して心理的な看護介入を行い、その結果、患者は病気や治療を適切に受け止め、ストレスサーに応じた効果的な対処法を用いて行くことができるようになり、前向きな取り組みが促進され、QOL の改善または維持が図られることを評価した。介入の中でも認知的支援は、患者の認知の過程に焦点を当て、その歪曲部分を修正する支援であるため、がんと診断され治療を受ける状況に対するがん患者の脅威性を緩和させる介入として効果があることが示されていた。

IV. 考察

緩和的がん薬物療法中の進行・再発がん患者に関する研究は、2004 年以降増加傾向にあった。また 2008 年度には外来化学療法に対する保険点数の算定が開始され、がん薬物療法の治療の場所が外来へとその中心をシフトしたことで、外来治療件数が増加し、それに伴い研究数も増加したと考えられる。今回の研究対象者はほとんどが患者であり、研究対象者のがん腫は、肺がん、乳がん、大腸がんを含む消化器がんの順で多かった。研究方法についてはほとんどが質的記述的研究であり、患者のありのままの体験や心理が示され、これらは先行研究³⁰⁾と同様の結果であった。今回の結果のがん種が対象として多く研究されていた背景には、適応となる数多くのがん薬物があること、またそれにともない治療が長期にわたって継続可能であるため、結果患者の身体的・心理社会的負担にもつながり、また家族の心理社会的問題³¹⁾にも影響していることが考えられ、臨床において多くの看護師が課題として捉えているこ

とが反映していると考える。

加波ら³²⁾は、がん化学療法に関する研究デザインについて、質的研究と実態調査研究が占める割合が高く、仮説検証型研究や準実験研究・実験研究は少数であり、今後エビデンスレベルの高い研究をすすめていくことの必要性を述べている。これらは、今回の結果と同様であり、さらなる研究の蓄積をおこない、エビデンスの高い研究を進めていくことが必要であるといえる。

緩和的がん薬物療養を受ける患者を対象とした研究では、患者はがん薬物療法やがんそのものによって生じる体験や心理・社会的な影響、また患者におこるさまざまな現象に対するセルフケアについて研究され、患者のありのままの体験や心理面、家族との関係に関し報告されていた。患者はがん薬物療法を継続していく中で、治療効果を期待し、可能な限り治療を継続できるように、療養環境の調整も含めた有害事象へのマネジメントをおこなっていた。また治療の不確実さに不安を抱きながらも、「生きる意味」を考え、家族や周囲の支えを実感していた。さらに治療の終盤においては、「今後の生き方」について考えを巡らせる一方で、「死が迫っているかも」という不安も抱きつつ、患者自身の気持ちの揺れを肯定的に捉え、また進行・再発がんという死をより意識せざる得ない状況においても、人として成長し続けている様子が示されていた。これらより緩和的がん薬物療法を受ける進行・再発がん患者は、生涯がんとともに生きていかなければならず、日々がんへの脅威を抱き、気持ちのどこかで死を意識するという特異的な状況におかれている存在であることを、看護師は認識し、看護を提供していく必要がある。

今後は、蓄積された研究を検証と実践の積み重ねをおこない、評価や介入研究へと発展させていくことが必要と考える。また今回は患者のセルフケアについて 12 の研究が報告されており、がん薬物療法を受け入れながら、自身の今までの生活の再構成をお

こない、現実を受け入れ、また治療継続に向けてのさまざまなセルフケアを患者はおこなっている現状が明らかにされていた。これらは患者の自律や適応に目を向けた研究でもあり、患者は進行・再発がんという病をかかえた不確かな状況においても適応し続けている様子が示されていたといえる。

がん患者家族を対象とした研究では、家族は患者同様、心理社会的な困難感を抱いていた^{25),26)}。これらは、家族ががんになった患者と同じかそれ以上に、精神的負担がかかる「第二の患者」³¹⁾という存在であることから考えられる。コミュニケーションが患者と家族の関係性を良好に維持し、また肯定感にもつながることが示唆されている²⁵⁾ことや、患者は家族に負担をかけたくない^{14),33)}という思いを抱いていることを考慮しながら、看護師は患者が家族と治療状況、また現状について情報共有をし、現状にもとづいた生活の工夫や組み立てを実施しているのか確認し、必要に応じてコミュニケーションの必要性や方法を伝えていくことが必要であると考え。今回家族を対象とした研究は 2 件と少なく、現状の把握が十分にできているとは言えない。背景には、核家族化、それに伴う家族一人当たりの多重役割などの現状が影響し、家族同伴での受診行動が減っていることが考えられる。今後は、治療評価時などの機会を活用しながら、家族来院の必要性などを患者や家族に伝える支援をしていくことも必要であり、家族を対象にした研究を家族の負担感を考えながら蓄積することが重要と考える。

看護師に焦点を当てた研究は 4 件と少なく、外来看護に焦点をあてた研究が 2 件、初回治療を受ける非小細胞肺癌患者に対して心理的な看護介入研究²⁹⁾が 1 件おこなわれていた。

がん薬物療法は外来が中心となっている。看護師は外来という限られた時間の中で、患者アセスメントや副作用の指導、心理・社会面の支援など、さまざまな看護を展開することが求められ、より高度な看護技術を要求される現状にあると考えられる。し

かし、外来で化学療法を受ける進行がん患者を支える看護の問題として、患者・家族のニーズに沿った看護援助の不足や他部門との連携、また治療環境の不備²⁸⁾が示されていた。この研究は 2004 年の結果であるため、現状治療環境は診療報酬改定などが後押し、改善傾向にあると考えられる。またもう一方で、がん薬物療法は近年さまざまな種類の治療薬が開発され、その効果・副作用は多岐にわたり、看護師は薬剤の知識について最新の情報を収集し、副作用の理解や、それらにかかわる患者の生活への影響を認識して、看護につなげていく必要があるため、より高度な看護実践が求められている現状であるといえる。今後は臨床における看護の現状を把握するため、看護に焦点をおいた研究を積み重ねていくことが必要であると考えます。

V. おわりに

国内文献における緩和的がん薬物療法中の進行・再発がん患者に関する文献検討を行なった結果、緩和的がん薬物療法を受ける患者を対象とした研究がもっとも多くみられ、患者の体験や困難、セルフケアに関して研究が積み重ねられていた。今後は、これらの結果を活かし、患者の QOL も含めた介入研究や関連検証研究など、よりエビデンスの高い研究を進めていくことが必要と考える。また看護師を対象とした研究においては、がん専門看護師やがん関連の認定看護師を対象とした看護実践に関する研究を積み重ねていくことが重要であると考えます。

引用・参考文献

- 1) 瀬山留加他：化学療法を受けながら転移や増悪を体験したがん患者の治療継続過程における情緒的反応と看護支援の検討、日本がん看護学会誌、21(1):31-39、2007
- 2) 糸川紅子他：外来化学療法を受ける進行・再発

- 大腸がん患者の症状緩和・悪化防止のための生活調整、千葉看護会誌、VOL. 20 No. 1、2014
- 3) Roeland, E. J., et al : Palliative chemotherapy: oxymoron or misunderstanding? : BMC Palliative Care ;15:33,2016
- 4) 宮下光令他：緩和ケアの Quality Indicator Palliative Care Research、2(2):401-415、2007
- 5) 国立がん研究センターがん情報サービス 薬物療法もっと知りたいかたへ 閲覧日 2020 年 10 月 1 日
- 6) 竹山広美他：進行肺がん患者の病いの体験の意味づけに関する研究、日本看護福祉学会誌、20(2)、2015
- 7) 小貫恵理佳他：手術を受けた肺がん患者が外来で再発治療をうけながら生きていく体験、順天堂大学医療看護学部、医療看護研究 16:26-34、2015
- 8) 森本悦子他：地方都市で外来化学療法を継続する高齢がん患者の困難とニーズ、関東学院大学看護学会誌、1(1):1-7、2014
- 9) 林田裕美他：外来で化学療法を受けながら生活するがん患者の困難と対処、広島県立保険福祉大学誌 人間と科学、5(1):67-76、2005
- 10) 三木幸代他：オキサリプラチンによる末梢神経障害をもつ進行再発大腸がん患者の体験、日本がん看護学会誌、28(1)、2014
- 11) 太田亜紀子他：進行肺がん患者が初回化学療法を受ける時期に抱く思い：順天堂大学医療看護学部 医療看護研究 21:42-49、2018
- 12) 笹井知子：診断から初回治療導入期における肺がん患者の不確かさの管理、日本がん看護学会誌、30(1)、2016
- 13) 長光代他：がん化学療法を受ける患者の治療延期によって生じる思いの分析、富山大学看護学会誌、15(2)、2016
- 14) 宮津珠恵他：外来通院治療中の再発乳がん患者が療養生活で抱く思い、順天堂大学医療看護学

- 部 医療看護研究 19 : 52-61、2017
- 15) 戸田くるみ他 : 進行大腸がん患者の経口抗がん剤外来治療継続過程における思い、お茶の水看護学雑誌、7(1):20-29、2012
- 16) 二宮一美他 : 外来がん化学療法患者を対象とした苦痛のスクリーニングの導入 苦痛対応に必要なリソースに関する分析、Palliative Care Research、14(1) : 15-21、2019
- 17) 神谷潤子 : 化学療法を受けている再発がん患者の希望の維持に影響するソーシャル・サポート、日本赤十字看護会誌、15(1) : 11-19、2015.
- 18) 鈴木香苗他 : 短期入院による化学療法を継続する大腸がん患者のセルフケアに関する研究、人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌、11(1) : 89-102、2011
- 19) 藤川直美他 : 外来で EGFR 阻害剤治療を受ける進行・再発大腸がん患者の爪や指先の皮膚症状の体験とそのマネジメント、大阪大学看護学雑誌、25 (1) : 1-9、2019
- 20) 田村紀子他 : 外来でカペシタビン治療を受ける再発・進行乳がん患者の手足症候群のセルフマネジメントの実態、日本がん看護学会誌、30(2)、2016
- 21) 小西玲奈他 : がん薬物療法に起因する脱毛が発現した成人男性患者の職場復帰時の感情・考え、対処、日本がん看護学会誌、30(1)、2016.
- 22) 平山憲吾 : 外来でイリノテカンを受ける大腸がん患者の排便マネジメントに関する調査、看護総合科学研究会誌、16(2)、2016
- 23) 糸川紅子 : 外来化学療法を受ける進行・再発大腸がん患者の症状緩和・悪化防止のための生活調整、千葉大学看護学会誌、20(1)、2014
- 24) 井ノ下心他 : 化学療法を受ける再発白血病患者の有害事象への対処行動、日本がん看護学会誌、26(2)、2012
- 25) 二井谷真由美他 : 外来で化学療法を受ける進行・再発消化器がん患者の配偶者が知覚している困難と肯定感、日本がん看護学会誌、21 巻 2 号、2007
- 26) 本間ともみ他 : 外来で化学療法を受ける進行がん患者の家族の心理社会的問題と看護援助、青森県立保健大学雑誌、7(2) : 271-280、2006
- 27) 鳴井ひろみ他 : 外来で化学療法を受ける進行がん患者の看護援助に関する研究 (第 3 報) -外来で化学療法を受ける進行がん患者を支える上での外来看護の問題と解決への取り組み-、青森県立保健大学雑誌、6(2) : 33-42、2004
- 28) 本間ともみ他 : 外来で化学療法を受ける進行がん患者の看護援助に関する研究 (第 2 報) -外来で化学療法を受ける進行がん患者の心理社会的問題に対する看護師の認識と看護援助-、青森県立保健大学雑誌、6(2) : 27-32、2004
- 29) 岡本愛他 : 非小細胞肺がんで病期Ⅲ期以上と診断され初回治療 (化学療法・放射線治療) を受ける患者に対する心理的な看護介入の効果、日本がん看護学会誌、29(2)、2015
- 30) 大橋光他 : 日本における再発乳がん患者に関する研究の現状、熊本大学保健学科紀要、8、2012
- 31) 国立がん研究センターがん情報サービス 家族ががんになったときに知っておきたいこと、閲覧日 2020 年 10 月 4 日
- 32) 加波愛子他 : 2003 年から 2012 年に発表されたがん化学療法に関する看護研究の動向と課題、がん看護、20(5) : 573-578、2015
- 33) 鳴井ひろみ他 : 外来で化学療法を受ける進行がん患者の看護援助に関する研究 (第 1 報) -外来で化学療法を受ける進行がん患者の心理社会的問題-、青森県立保健大学雑誌、6(2) : 19-26、2004

表 1 緩和的がん薬物療法を受ける進行・再発がん患者に関する分析対象論文の概要

著者 (発行年)	研究方法	がん種	治療 場所	がん薬物 療法の種類	目的
橋本 (2019)	質的記述的	複数がん	外来	抗がん剤	がんの再発・転移の告知を受け外来で化学療法を受けるがん患者とその家族がどのような気がかりを抱えているのかについて明らかにする
二宮. 他 ¹⁶⁾ (2019)	量的	複数がん	外来	記載なし	がん化学療法の苦痛のスクリーニング後の症状改善のための対応に必要なリソースを明らかにし、スクリーニング体制構築の問題を指摘し、有用な緩和ケアの提供を行う条件を提示する
畠山. 他 (2019)	混合研究	大腸がん	不明	抗がん剤 分子標的剤	EGFR 阻害剤治療を受ける進行再発大腸がん患者が体験する皮膚症状のつらさと関連要因を明らかにする
藤川. 他 ¹⁹⁾ (2019)	質的記述的	大腸がん	外来	抗がん剤 分子標的剤	EGFR 阻害剤治療を受ける進行・再発大腸がん患者の爪や指先の皮膚症状の体験とそのマネジメントを明らかにする
森下. 他 (2018)	量的	肝臓がん	不明	抗がん剤 分子標的剤	標準的治療の適応外となり最終治療として化学療法を受けることを決断した進行肝がん患者の QOL を経時的に明らかにする
太田. 他 ¹¹⁾ (2018)	質的記述的	肺がん	不明	抗がん剤	進行肺がん患者が初回化学療法を受ける時期に抱く思いを明らかにし、看護援助について考察する
宮津. 他 ¹⁴⁾ (2017)	質的記述的	乳がん	外来	抗がん剤 ホルモン剤	外来通院治療中の再発乳がん患者が療養生活で抱く思いを明らかにし、再発乳がん患者が自分らしく療養生活を送るための看護援助を考察する
矢ヶ崎 (2016)	質的記述的	乳がん	外来	抗がん剤 (経口)	経口抗がん剤治療を受ける再発・転移性乳がん患者がどのように病状や治療を認識し、日常生活の中で服薬を意味づけ、判断し、行動しているのかなど、服薬に関する経験を明らかにする
田村. 他 ²⁰⁾ (2016)	質的記述的	乳がん	外来	抗がん剤 (経口)	カペシタビン治療を受ける乳がん患者が、どのように HFS のセルフマネジメントを行っているのか明らかにする
千崎 (2016)	質的記述的	膵臓がん	外来	抗がん剤	手術の適応にならずに化学療法を受けている膵がん患者は、療養生活の過程でどのような体験をしているか
笹井. 他 ¹²⁾ (2016)	質的記述的	肺がん	不明	記載なし	進行肺がんの診断から初回治療導入の期間に患者がどのように不確かさを認知し、どのように管理しているのか
小西. 他 ²¹⁾ (2016)	質的記述的	血液がん	外来	抗がん剤	がん薬物療法に起因する脱毛が発現した成人男性患者の職場復帰時の感情、考え、対処を明らかにする
平山 ²²⁾ (2016)	質的記述的	大腸がん	外来	抗がん剤	イリノテカンを受ける切除不能な進行または再発大腸がん患者の排便マネジメントの実態を明らかにする
長. 他 ¹³⁾ (2016)	質的記述的	複数がん	外来	記載なし	投与基準を満たさないことから治療延期を繰り返すがん患者の思いを明らかにする
岡本. 他 ²⁹⁾ (2015)	量的	肺がん	不明	抗がん剤	初回治療を受ける非小細胞肺がん患者に対して心理的な看護介入を行い、その効果を検討する
森下. 他 (2015)	グランデッ ト・セオリー	肝臓がん	不明	抗がん剤	化学療法以外に治療の選択肢がない進行肝がん患者の受療体験を明らかにし、看護支援の検討をおこなう
小貫. 他 ⁷⁾ (2015)	質的記述的	肺がん	外来	抗がん剤	手術後に再発した肺がん患者が外来で治療を受けながら生きていく体験を明らかにする
田中. 他 (2015)	質的記述的	複数がん	外来	記載なし	化学療法を受ける進行がん患者のアドヒアランス行動とその意味づけを明らかにする
竹山. 他 ⁶⁾ (2015)	質的記述的	肺がん	不明	抗がん剤	進行肺がん患者の病いの体験の意味づけを明らかにする
神谷 ¹⁷⁾ (2015)	質的記述的	複数がん	外来	抗がん剤	化学療法を受けている再発がん患者の希望の維持に影響するソーシャル・サポートを明らかにする
森本. 他 ⁸⁾ (2014)	質的記述的	複数がん	外来	記載なし	地方都市で外来化学療法を継続する高齢がん患者の治療を継続する上で体験する困難とニーズを把握する
糸川. 他 ²³⁾ (2014)	質的記述的	大腸がん	外来	抗がん剤	進行・再発大腸がん診断され外来化学療法を受ける進行・再発大腸がん患者の身体症状に伴う生活調整を明らかにする

表1 緩和的がん薬物療法を受ける進行・再発がん患者に関する分析対象論文の概要 (続き)

著者 (発行年)	研究方法	がん種	治療 場所	がん薬物 療法の種類	目的
三木. 他 ¹⁰⁾ (2014)	質的記述的	大腸がん	外来	抗がん剤	オキサリプラチンによる抹消神経障害をもつ進行再発大腸がん患者の体験を明らかにする
戸田. 他 ¹⁵⁾ (2012)	質的記述的	大腸がん	外来	抗がん剤 (経口)	進行大腸がん患者が外来で経口抗がん剤治療を継続する過程で抱える思いを明らかにする
井ノ下. 他 ²⁴⁾ (2012)	グランデッド・セオリー	血液がん	入院	抗がん剤	再発白血病患者の有害事象への取り組みや心がけに注目し、これらを有害事象への対処行動としてその構造を明らかにし、患者の対処行動を強化できる看護援助を検討する
楠葉. 他 (2012)	量的	複数がん	外来	記載なし	患者の気がかりとそれを他者に話しているかどうかについて明らかにする
濱田. 他 (2012)	質的記述的	肺がん	外来	抗がん剤	標準的治療を受けている進行非小細胞肺がん患者の自己の見通しを持つ体験について探求する
船橋. 他 (2011)	質的記述的	肺がん	外来	抗がん剤	外来化学療法を継続する進行肺がん患者の抱える問題を明らかにする
鈴木. 他 ¹⁸⁾ (2011)	質的記述的	大腸がん	入院	抗がん剤	短期入院による化学療法を継続する大腸がん患者のセルフケアを行う上での問題とセルフケアを明らかにする
齋藤. 他 (2010)	関連検証	複数がん	外来	記載なし	外来で化学療法を受けるがん患者のセルフケア行動の実態を把握し、自己効力感との関連を明らかにする
二井谷. 他 ²⁵⁾ (2007)	質的記述的	消化器 がん	外来	記載なし	化学療法を受ける進行・再発消化器がん患者の配偶者が、外来化学療法を受けている患者と生活を共にする中で、どのような困難を感じ、ケアを通してどのような肯定感を知覚しているのか明らかにする
矢ヶ崎. 他 (2007)	質的記述的	乳がん	外来	抗がん剤 ホルモン剤	治療を続けている再発乳がん患者がどのような安定した自分へ統合していく体験をしているのか、どのような意味をもつのか、それらの意味を探求する
瀬山. 他 (2007)	質的記述的	消化器 がん	外来	抗がん剤	化学療法を開始した消化器がん患者が、副作用や期待する治療効果が得られなくとも化学療法を受ける意思決定を行った要因について明らかにする
本間. 他 ²⁶⁾ (2006)	質的記述的	記載なし	外来	記載なし	化学療法を受ける進行がん患者の家族が、患者と共に社会生活を送るなかで、どのような心理社会的問題を抱え生活しているのかを明らかにする
林田. 他 ⁹⁾ (2005)	質的記述的	乳がん	外来	抗がん剤 ホルモン剤	外来で化学療法を受けながら生活するがん患者の困難と対処を明らかにする
鳴井. 他 ²⁷⁾ (2004)	質的記述的	記載なし	外来	記載なし	化学療法を行っている病院の外来看護管理者及び外来看護責任者を対象に、外来で化学療法を受ける進行がん患者を支えていく上で現在の外来看護にはどのような問題があるのか、またその問題の解決に向けて今後どのように取り組んでいく必要があると考えているのかを明らかにする
本間. 他 ²⁸⁾ (2004)	質的記述的	記載なし	外来	記載なし	化学療法を受けている進行がん患者の心理社会的問題に対する外来看護師の認識と患者に対して行っている看護援助を明らかにする
鳴井. 他 ³³⁾ (2004)	質的記述的	複数がん	外来	抗がん剤	化学療法を受ける進行がん患者はどのような心理社会的問題を抱えて生活しているのかを明らかにする
伊藤. 他 (2004)	質的記述的	記載なし	外来	抗がん剤	外来点滴センターで化学療法を受けている STAI 状態不安得点が高いがん患者の不安内容を把握する
石田. 他 (2004)	質的記述的	乳がん	外来	抗がん剤	外来で化学療法を受けている再発乳がん術後患者における日常生活上の気がかりと治療継続要因を探求する